

外国語学習環境と動機付けとの関連性 ーL2ナラティブの内容分析を通してー

吉田 安曇

1. はじめに

ナラティブ・アプローチ (NA) は、様々な分野や場面において語り手の内面世界を探求する学問領域であり、医療、教育、心理学等、幅広い分野における実践とその有効性の実証されてきた (Charon et al., 2016; Hasegawa & Sakamoto, 2023)。特に、海外の L2 教育界では、学習者のナラティブからより効果的な学習法 (Language Learning Strategies: LLSs) を探求する研究が見られる (Nguyen, H. & Terry, D. 2017; Triyoga, A. et al. 2022 等)。日本においても、那須 (2022) が、EFL 学習者とのインタビューを通して彼らの英語学習履歴について調査し、英語学習の成功事例に関するナラティブを分析することで、効果的な学習法の提示を試みている。しかし、これらの研究は、母語 (L1) によるナラティブを分析データとして用いており、学習者が外国語 (L2) で発信した語りに着目した研究は少ない。その理由の一つは、例えば日本人学習者にとっては日本語で表現する方がはるかに容易であるからだと言えよう。しかし、英語教育がコミュニケーション重視へとシフトしつつある昨今、質的・量的に充実したアウトプットができる学習者も徐々に増えている。また、これらのナラティブでは、自身の経験や意思がストレートに表現されることが多く、その内容を詳細に分析することは動機付け等のあぶり出しに繋がり、また、英語の特徴や文体面に着目すれば、学習者の英語運用能力に関する示唆の獲得が期待できる。

本研究の目的は、EFL (English as a Foreign Language) 学習者が自身の英語学習について記述した英文ナラティブ (written narrative) の内容に焦点を当て、英語への思いや学習体験等の描写を詳細に分析することで、外国語学習の動機付けへと作用する学習環境について考察することである。本稿では特に、①どのような学習環境が動機付けへと有意に作用するのか、②L2 によるナラティブ分析の意義とは何か、の 2 つの問いに対する検証を試みる。

2. 先行研究と本研究の意義

幅広い分野において援用されてきた NA であるが、国内外の英語教育界においても広く応用されている。例えば、前出の那須 (2022) や竹内 (2007) は、EFL 学習者、特に英語学習成功者とのインタビューを通して、彼らの英語学習履歴について調査し、効果的な学習法の特特定化を試みている。しかし、これらの研究は L1 でのナラティブを分析データとして用いたものであり、学習者が L2 で発信したナラティブに焦点を当てた研究は依然として少ない。また、学習者とのインタビュー、いわゆるオーラルヒストリーに焦点

を当てた研究が多い中、学習者が自身の英語学習について英語で記述した語りに焦点を当てた例は、ほとんどないのが現状である。

L2でのナラティブが研究データとして評価されるべき理由として、まず、日本語母語話者以外の人とも内容を共有できること、学習者の英語運用能力をある程度判定できること、また、学習履歴を振り返り文字にすることで学習者自身も気付くことのなかった新たな側面が発見できること等が挙げられる。さらに、学習者の意見はL1よりもL2の方が率直かつ直接的に表現される可能性が高い。その主な理由としては、複雑な語彙や言い回し、比喻、文型などの知識がないため、単純に表現するしかないということが考えられるが、話し手が使用する言語によって人格が変容するとの見解もある（Grosjean 2011; Luna et al. 2008 参照）。英語で文章を書くことは、日本人学習者をよりオープンにし、自分の感情を率直に表現するのに役立つと考えられる。

次に、EFL学習者の英作文分析に関する研究としては、Yoshida et al. (2022) が挙げられる。日本人学習者の英語運用能力について文体論を援用し評価・分析することで、早期L1/L2学習環境とその後のL2習熟度との関係について、教育的示唆を獲得できることを示した研究として重要ではあるものの、外国語学習成功者になるためのより良い学習法を探索するためには、さらなる調査が必要である。本研究では、L2ナラティブから抽出した効果的な外国語学習法に繋がり得るL2学習環境について検証し、インタビュー形式の語りでは表出しにくい学習者の率直な意見や本音についても考察していく。

3. 実験の方法

2023年6月から2024年6月にかけて、日本の国立大学の学生223名が本研究に参加した。参加者は50分間で「英語と私」というテーマについて、自身の英語学習経験や英語が役に立った(あるいは立たなかった)状況について、約200語の英文エッセイを書いた。エッセイを書く際には、タブレットやスマートフォン、電子辞書などの電子機器の使用を禁止し、学習者自身のことばで書くことを促した。また同時に、学習履歴に関するアンケート調査を実施した。アンケートでは、英語学習の開始時期、学習方法、英語への意識、現在保有する資格等について尋ねた。参加者全員のナラティブ及びアンケートを精査した結果、語りの内容や英語の特徴、また英語学習背景等において重要な意味を持つ4つのサンプルを選定し、さらに詳細な分析を行った。なお、4名の協力者の基本データについては、下記の表1に示す。

表1. 4名の協力者の基本データ

	学 年	資 格	英語学習を 始めた年齢	今、英語が 得意ですか？	授業外での 英語学習
A	国立大学 文系2年生	英検2級	小学校高学年	どちらかと言うと得意	音楽鑑賞 動画視聴

B	国立大学 理系 2 年生	英検 2 級	小学校中学年	とても苦手	特になし
C	国立大学 文系 2 年生	英検 2 級	中学校入学以降	とても苦手	特になし
D	国立大学 理系 2 年生	英検 2 級	中学校入学以降	とても苦手	特になし

この 4 名を選んだ理由としては、全員大学 2 年生で、かつ英検 2 級を保持していることから、同等レベルの英語力が見込まれたからである。英語に対する姿勢としては、協力者 A のみが、「どちらかと言うと得意」と答えており、授業以外にも音楽鑑賞や動画視聴等、積極的に英語学習に取り組んでいることが分かる。

ナラティブ分析に関しては、表 2 で示す Labov (1972) のナラティブ構造を参照した。

表 2. The Overall Structure of Narrative (Labov 1972)

1	Abstract	What was this about?
2	Orientation	Who, when, what, where?
3	Complicating action	Then what happened?
4	Evaluation	So what?
5	Result or resolution	What finally happened?
6	Coda	What does it all mean?

Labov (1972) は、社会言語学の分野で話し言葉の構造に焦点を当てた研究であるが、文学、哲学、心理学など多様な分野で応用されている影響力のあるモデルである。このモデルを使用する利点としては、起承転結の明確さを確認することができ、特に“Evaluation”に注目することで、語りの巧みさを評価できる点が挙げられる。

4. 分析結果と考察

本章では、ナラティブの分析結果について考察していく。まず、223 名のナラティブで語られた動機付けに作用する要因について示す。さらに、全てのナラティブを精査したのち、教育的に重要な意味を持つ 4 つのサンプルを選定し、個別に分析した結果についても提示する。

4. 1 全体の傾向

本項では、223名すべてのナラティブの中で言及された描写についてまとめる。まず、英語学習にポジティブな影響を与えた要因について、表3で示す。

表3. ポジティブに作用した要因（複数の描写含む）

特 徴	人数	割合(%)
洋画・洋楽・洋書が好きで、もっと理解したい	55	24.7
海外滞在（旅行やホームステイ等）	39	17.5
外国人への手助け（道案内や駅等）	33	14.8
バイト先（飲食店、ホテル、コンビニ等）で英語を使う	23	10.3
外国人との交流（親戚、留学生等）	21	9.4
幼少期・小中学時代の英会話スクール・サマーキャンプが楽しかった	16	7.1
将来、海外に行きたい（留学含む）	15	6.7
オンラインゲームで英語を使う	8	3.6
将来のキャリアで必要（医師、看護師、英語教員等）	7	3.1
SNS（YouTube 等）で英語を使う	7	3.1
現在、研究やリサーチ等で必要（医学部等）	5	2.2
小学校の先生・中学の ALT の先生が楽しかった	4	1.8
高校の英語の先生が好きだった	4	1.8
英検取得のために学習を頑張った	4	1.8
TOEIC が必要	3	1.3
今、英会話スクールに通っている	2	0.9
外国人と話すことが何より重要	2	0.9
英語学習は他言語習得にも役立つ	2	0.9
ホストファミリーとして外国人を受け入れた	2	0.9
翻訳アプリでは十分ではない	1	0.4
父親が外国人の友人に感化された	1	0.4
大学のスピーキング授業が役に立っている	1	0.4
将来の可能性が広がる	1	0.4
塾の英語の先生が分かりやすかった	1	0.4
高校で単語を頑張って英語が伸びた	1	0.4
外国人の友達を作りたい	1	0.4
英語学習用アプリで英語が好きになった	1	0.4
英語でニュースを読む	1	0.4
英語での取扱説明書を読む必要がある	1	0.4
スピーチコンテストで自信を持てた	1	0.4

一つのナラティブで複数の特徴が描写された場合を含むため、割合の合計は100%になっていない。全体の傾向として、自身の体験だけでなく、英語学習全般に対する肯定的な意見が多く見られる。最も大きな影響を与えているのは、映画・音楽等の「英語圏の文化」を楽しむことへの欲求である。また、海外旅行や外国人への道案内、留学生との交流等、教室外でのよりオーセンティックで実用的な状況下での英語使用体験が動機付けへと有意に作用していると考えられる。「外国人への手助け」には「うまく助けられなかった」と述べた7名が含まれているが、これは英語使用の成功体験だけでなく、うまく助けられず悔しい思いをしたことが英語学習をもっと頑張りたいという動機付けへとプラスに作用した好例と言えよう。また、医学部等の理系学生を中心に、将来のキャリアや現在の研究に英語が必要であるとの意見も見られた。

次に、ネガティブに作用した要因について表4に示す。

表4. ネガティブに作用した要因（複数の描写含む）

特 徴	人数	割合(%)
日本の学校教育・試験勉強は実用に向いていない	6	2.7
話す時にミスするのが怖い	5	2.2
英語を使う実践的場面がなかった	5	2.2
中学校で授業が難しくなった・小テストや宿題が多すぎた	4	1.8
高校で授業が難しくなった・宿題が多すぎた	4	1.8
将来必要ない	3	1.3
日本は早期 L2 教育をするべき	2	0.9
モチベーションが見つからない	2	0.9
中学・高校の先生がいつも怒っていて怖かった	1	0.4
高校では得意だった (L&R) が、今は苦手 (S&W)	1	0.4
小学校での英語の宿題が嫌いだった	1	0.4
英語特有のルールが理解できなかった	1	0.4
塾の授業が面白くなかった	1	0.4
日本が好きで外国に行きたくない	1	0.4
翻訳アプリで十分である	1	0.4
英語への第一印象が悪かった	1	0.4
外国人の英語は速すぎて聞き取れない	1	0.4

学習者の英語に対する姿勢にネガティブな影響を及ぼしている要因には様々なものがあるが、「実用・実践」が一つのキーワードと言える。つまり、授業内容や課題、試験等、「あまり実用的ではない」現在の学校における英語教育システムに不満を抱いている学習者が少なからず存在している。また、より実践的な場面での英語使用体験のない学習者は、英語が必要であるという意識が希薄であると考えられる。L2ナラティブにおいて

は、学習者の本音がより顕著に表れやすいという可能性を考慮すると、この事実は現在の日本の英語教育が学習者のモチベーションにどのような影響を与えるかを考える上で重要な意味を持つと言えよう。

4. 2 個別のナラティブ分析結果

次に、全てのナラティブを精査した結果、語りの内容や英語の特徴、また英語学習背景等において特に重要な教育的示唆を示した4名の協力者（表1を参照）の分析結果について提示していく。

4. 2. 1 協力者A

まず、協力者Aのナラティブについて見ていく。スペル、文法、文中の大文字・小文字の区別等、ナラティブに見られる誤りについては、訂正なしに原文のまま引用する。また、各文には説明の便宜上、番号を振る。

協力者 A

(1) I think learning English will be more rich our life. (2) In fact acquiring English are not easy. (3) However, we can communicate with various people by using gestures and drawing pictures. (4) I want you to tell about interacting by using English.

(5) First, I wrote letters for foreign English teacher in easy English when I was a junior high school student. (6) After a while she sent me letters. (7) I did this many times. (8) Her letters were always written 'I'm looking forward to your cute letters.' (9) when I saw this message, I was always happy. (10) I knew interacting with foreign people would be possible.

(11) Second, I met foreign customers when I was working in cafe after I became a university student. (12) I was nervous when I saw them because they could understand only a little Japanese. (13) Therefore I talked them about cafe's menu and the contents by using limited English. (14) After a while when they went away from there, they said me 'not to be shy. (15) Your English are very good. (16) Let's try talking English. (17) I hope you do it.' (18) I was cheered up from their words. (19) I was more interested in English.

(20) Thanks to them I like learning English very much now. (21) I want to meet various foreign people and travel many forein countries with foreign friends someday.

協力者Aのナラティブには、Abstract (1~4)、Orientation・Complicating action・Evaluation (5~19)、Coda (20~21) という構成が見られ、Labov (1972) の要素が明確に示されている。このナラティブには、「教師との文通」(5~10)と「アルバイト」

(11～19) の2つのエピソードが含まれており、それぞれのエピソードも基本的なナラティブ構造を持つ。

最初のエピソードでは、この協力者の英語に対する積極的な姿勢が示され、彼女が非常に努力家であることが分かる。外国人教師に手紙を「何度も」書いている(7)が、これは中学生にとって容易なことではないだろう。また、この協力者にとって、教師の一言が大きな激励になっていることも指摘したい。つまり、‘I’m looking forward to your letters.’ だけでは、彼女の心に深く響くほどの意味は持たなかったのではないだろうか。‘cute’ という Evaluation、あるいはブースターこそが、彼女にとって最も重要な意味を持ち、英語学習を継続する助けとなったと言える。協力者Aの語りは、教師からの温かい励ましと期待が外国語学習には不可欠であることを示している。

さらに、この協力者は現在も実践的に英語を使う機会に恵まれている。彼女はアルバイト先のメニューについて英語で説明をしなければならず、外国人客とのコミュニケーションが業務の一部となっている。「シャイ」な彼女にとっては、決して容易なことではないはずだが、外国人客を精一杯もてなそうという気持ちが伝わってくる。また、外国人客の言葉を直接話法で再現することで(14～17)、彼女のナラティブに物語性を持たせているのも効果的であると言えよう。その結果、彼女のナラティブは読者により生き生きとした印象を与え、親しみやすさやリアリティを感じさせている。

総じて、協力者Aは努力家で、英語学習を楽しんできたようである。また、外国人教師や外国人客からの好意的な評価や感想が、この協力者の心を動かし、英語学習へのさらなる努力へと繋がったと言える。

4. 2. 2 協力者B

次に、協力者Bのナラティブを示す。

協力者 B

(1) I have studied English since I was a elementary student. (2) However I don't like studying English. (3) Today, I introduce some episode.

(4) I had English test for the first time when I was junior high school student. (5) I studied hard for the test. (6) I got 98 score, so I was so happy. (7) But I was schocked the reason I lost 2 score. (8) There were writing. (9) I thought that first word is large. (10) For example, ‘I play soccer.’ (11) However I wrote ‘When ‘i’ was a child, ...’ (12) I don't know the reason why ‘I’ is always large word. (13) I wrote two sentences like ‘When i was...’, so I lost 2 score.

(14) However I have talked foreigners in English. (15) When I was high school student, I took the train to go to school. (16) At station, foreigners asked me the way to buy the ticket, the way to go XX^{注1)} station and the seasonal train. (17) I could explain them in English. (18) Then, I thought studying English is useful.

(19) I have studied English for long years. (20) But I don't like it. (21) However sometimes it is useful to help foreigners. (22) I think I have to continue studying English.

この協力者は、自身の英語学習経験について、かなりネガティブな形で2つのエピソードを紹介している。特に「初めての試験（4～13）」は、教師にとっても無視できない非常に重要な教育的示唆を含んでいる。日本の学校において試験は通常100点満点であり、彼女の最初の英語のテストは、98点と素晴らしい結果だったはずだ。しかし、残念ながらそれは英語学習へのモチベーションには繋がらなかったばかりか、トラウマ的な経験となってしまった。なぜ 'I' が常に大文字で表記されるのか正しく理解できなかったという経験は、理不尽な結果を強く印象付け、彼女の学習意欲を減退させたようである。英語学習初心者にとっては、我々が当然と考えるようなこともすべて新規の情報であり、外国語特有のルールについて適切な情報を提供することは教師の責務である。

一方、彼女は駅で外国人を助けた経験から、英語が実際に有益であることにも気付く。しかしながら、彼女の決意が 'will' や 'would like to'、あるいは主観的な判断である 'must' ではなく、外的要因により影響される 'have to' を用い表現されている (22) ことから、この協力者は依然として英語学習にあまり意欲的ではないことが分かる。第2章で述べたように、学習者は自分の意思を英語で表現する時、より直接的な表現を用いる可能性がある。この協力者も自分の気持ちを率直に表している部分が見られる (2・20)。もしこの語りがL1で記述されていたら、あるいはインタビュー形式での語りであったなら、英語教師を面前にして躊躇したかもしれない表現であると言えよう。

協力者Bの語りは、特に英語学習初心者にとって指導者が重要な役割を果たすことを示唆している。教師の役割がますます周辺のものになっている現代においても、学習者が抱く第一印象に大きな責任があることを、我々教師は今一度肝に銘じるべきであろう。

4. 2. 3 協力者C

協力者Cのナラティブは以下の通りである。

協力者 C

(1) I study English from junior high school. (2) However, I don't like English. (3) I have two reasons.

(4) First, It is very difficult for me to speak English. (5) I study writing and reading from I was junior high school student. (6) However, I don't study listening and speaking so much. (7) So, I am not good at speaking English. (8) I have no time to practice speaking English.

(9) Second, I can not understand means of studying English. (10) I studied English very hard to pass XX university when I was high school student. (11)

Certainly, Students in university study English very hard for TOEIC. (12) I want to be a Yogo teacher. (13) For me, TOEIC is not necessary. (14) Also, I do not have chance which communicate with foreign people I do not want to study abroad. (15) If I can not understand English words or sentences, I will search with smartphone.

(16) In conclusion, I think that English is necessary for many people. (17) However, It is too difficult to study English. (18) Also, I don't like English so much and can not understand means of studing English. (20) I wish I like English.

この協力者も協力者B同様、英語学習に対してあまり積極的な姿勢を示しておらず、そのような自身の気持ちを率直に表現している（2・18）。また、「英語が流暢に話せない＝得意ではない」という、いわゆる「Speaking 至上主義」とでも言うべき、昨今の英語学習を象徴するような心理が垣間見える（4～8）。教育現場における英語学習が、ますますコミュニケーション重視へと傾倒する中、このような認識は一般的になりつつあると言えるかもしれない。

この協力者のナラティブでも、実践的な英語使用の有無が英語学習への動機付けに作用していることが確認された。彼女は、実際に外国人とコミュニケーションを取る機会がなく（14）、英語を学習する意味が見いだせないと繰り返している（9・18）。多くの人にとって、英語は必要なかもしれないが（16）、自分が将来就きたい養護教諭という職種に英語（TOEIC）は必要ないと断じている（13）。実はこの主張は正しいとは言えず、現代社会においては、どんな職を持つにしても英語は不可欠であると言える。それを認識できていない学生の存在を、我々教育者は真摯に受け止めるべきである。教育現場において、英語の役割や英語を使用することで将来の可能性が広がるという事実を周知していくことは喫緊の課題である。

さらに、危惧すべきなのは、分からない単語や文があったとしても、スマートフォンで調べれば十分である（15）、と考えていることである。現代社会において、AI機能や翻訳アプリに全く頼らずに生きていくことは不可能に近いであろう。今後、言語教育との共存の道を探求していくことが急務である。この協力者が「英語を好きであつたら良かったのに」という思いを最後に吐露している（20）ことが、せめてもの救いかもしれない。

4. 2. 4 協力者D

最後に、協力者Dのナラティブについて示す。

協力者D

(1) I have been not good at English until several years and my recognition does not changed after I entered XX University. (2) In my life, I did not need to

get a variety of foreign language skills. (3) When I was a junior high school student or a high school student, I did not have to get good scores on English exams because I was very good at math, physics, and chemistry. (4) In addition, I had few chances to talk with foreign people. (5) On the other hand, I started to recognize the importance of learning English. (6) Learning English is vital in the future and in modern society.

(8) I belong to the medical school and I am going to be a doctor after a few years. (9) Doctors must read a lot of English literatures and study how to care some diseases. (10) Also, I may have to write an academic literature with my hand. (11) When doctors write academic literatures, they must read and utilize other articles.

(12) English is one of the important languages not only in academic areas but also daily life. (13) Japanese government make a lot of campaigns, so the number of foreign people live in Japan will increase. (14) Therefore, the number of chances to talk with people who speak other language for me will also increase.

(15) As I have already mentioned, I am not good at English. (16) But I will face to a variety of condition need to use English in the near future. (17) I ought to get various skills between I belong to XX University.

この協力者の英語運用能力は、4名の協力者の中で最も高いと思われる。例えば、否定語‘few’ (4) や、助動詞‘may’ と‘have to’ のコンビネーションも適切に使用されている (10)。しかし、本人は、「英語はあまり得意ではない」と繰り返している (1・15)。その理由として、言語スキルの習得の必要性をあまり感じてこなかったこと (2)、中学・高校時代は、数学・物理・化学等、いわゆる理系科目が大変得意だったため、英語で得点を稼ぐ必要がなかった (3) と述べている。さらに、外国人と話す機会がほとんどなかったという実用的場面での英語使用についても言及している (4)。

しかし、大学入学以降、英語の必要性を認識するようになってきていることが分かる (5)。現在医学部生として、リサーチ等で英語での論文の読み書きに携わる機会が増えていることが推測されるが、それに加えて、日本において外国人居住者が増えるにつれ、病院で診察を受ける外国人も今後ますます増加することが見込まれる。つまり、医師を目指すこの協力者にとっては、日常の業務において英語使用の必要性が増すと確信しているのであろう。大学在学中に様々な言語スキルを身に付けていきたいという決意が感じられる (17)。

協力者Dのナラティブからは、本来、あまり英語学習に熱心ではなかった学生が、大学での学習環境に応じて徐々に英語の必要性を再認識していった経緯が読み取れる。しかし、依然として本人の英語に対する意識はネガティブな部分を含んでいる (表1参照)。授業外での学習機会や学習法の提示等、教育者側のサポート体制の整備が求められる。

4. 3 考察

本研究のナラティブ分析の結果より、外国語学習において学習者の姿勢はもちろん重要であるが、AIの普及などで自律学習が一般的になった現代においても指導者の役割が無視できないということが確認された。例えば、協力者Aは教師との文通を通して温かい激励を得て、英語学習を継続してきた。一方、協力者Bは、教師が大文字と小文字のルールを十分に説明してくれなかったことから、ある意味不信感を抱いてしまい、その結果、英語学習に対する意欲を失ってしまった。このように、教師の役割が学習者の動機付けに良くも悪くも大きな影響を及ぼすことが明らかになった。

また、4人の協力者全員が、実用的場面における英語使用について言及していることは、重要な示唆であろう。実生活において英語を使用する経験は、英語の有益性に気付く、その結果、英語学習へのモチベーションの向上を促すと考えられる。大学英語教育に携わる者として、英語使用の実践的な機会や、それに近い状況を提供する必要性が示唆された。これは、今後の日本の英語教育にとって重要な課題である。教育現場での実践に制約がある場合は、教室外での英語使用の機会の提供、あるいは自立学習ツール等を提示していくことが有効かもしれない。

さらに、協力者C・Dについては、文系と理系における英語への意識の違いが明確に表れた。一般的に理系学生の方が、専攻科目に関わる課題やリサーチ等で英語に触れる機会が多いと推測される。一方、文系では、専門分野において英語使用の必要性に迫られている学生は比較的少ないように見受けられる。しかし、どんな分野であっても、英語が将来の可能性を広げてくれるツールであることを大学英語教育現場でより周知徹底していくことが求められる。

5. 結び

本研究の問い①どのような学習環境が動機付けへと有意に作用するのか、については、外国人への道案内等、実用的場面での英語使用体験の有無や、教師との関わりが学生の動機付けに大きな影響を及ぼすことが明らかになった。大学教育の現場でも、アカデミック英語の向上に加えて、より実践的な英語使用の機会を提供することが今後の課題となろう。次に、問い②L2によるナラティブ分析の意義とは何か、であるが、母語での語りではあまり見られないような率直な語彙・表現等の使用、あるいは教師との対面形式の対話では語られないような英語学習に対するストレートな意見も確認されたことから、学習者の英語運用能力及び学習背景の実態解明のために、L2 ナラティブ分析が有効な手段であることが示唆された。今後は、より多様な学習背景を持つ学習者のナラティブを収集・分析し、学習環境と動機付けとの関連性についてさらに深く検証を進めていく必要があるだろう。

注1) 特定を回避するため、筆者により匿名化した。以下、同様。

引用文献

- Carter, R. 2010. Methodologies for stylistic analysis. In McIntyre, D. & Busse, B. (Eds.), *Language and Style: In Honour of Mick Short*. Palgrave Macmillan.
- Charon, R., DasGupta, S., Hermann, N., Irvine, C., Marcus, E. R., Colón, E. R., Spencer, D., & Spiegel, M. (Eds.). 2016. *The principles and practice of narrative medicine*. Oxford University Press.
- Fogal, G. G. 2015. Pedagogical Stylistics in Multiple Foreign Language and Second Language Contexts: A Synthesis of Empirical Research. *Language and Literature*, 24(1), 54-72.
- Grosjean, F. 2011. Change of language, change of personality? Understanding the link between language and personality in bilinguals. *Psychology Today*. Retrieved February 17, 2024, from <https://www.psychologytoday.com/intl/blog/life-bilingual/201111/change-language-change-personality>
- Hasegawa, H. & Sakamoto, N. 2023. Narrative research on the internal cognition of Assistant Language Teachers at the preparation stage of the Japan Exchange and Teaching Programme. *JAILA Journal*, 9, 32-43.
- Labov, W. 1972. *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*. University of Pennsylvania Press.
- Luna, D., Ringberg, T., & Peracchio, L. A. 2008. One individual, two identities: Frame switching among biculturals. *Journal of Consumer Research*, 35(2), 279-293.
- 那須雅子. 2022. オーラルヒストリーを用いた英語学習に関するナラティブ研究. 那須雅子・坂本南美・寺西雅之 編『ナラティブ研究の実践と応用』学術研究出版. 65-81.
- Nguyen, H. & Terry, D. 2017. English Learning Strategies among EFL Learners: A Narrative Approach. *Journal of Language Learning*, 3(1), 4-19.
- 竹内理. 2007. 『「達人」の英語学習法 データが語る効果的な外国語習得法とは』草思社.
- Triyoga, A., Sa'diyah, H., & Hidayati, R. N. 2022. A Narrative Research of an EFL Student's Speaking Learning Strategy. *Journal of Language Teaching and Learning, Linguistics and Literature*, 10(2), 1671-1683.
- Yoshida, A, Teranishi, M., Nishihara, T., & Nasu, M. 2022. The Impact of L1 on L2: A Qualitative Stylistic Analysis of EFL Learners' Writings. In Zyngier, S. & Watson, G. (Eds.), *Pedagogical Stylistics in the 21st Century*, 343-369. Palgrave Macmillan.